諸行無常

株式会社愛工機器製作所 取締役社長　川口　巌

諸行無常という意味は、国語辞典によると、「万物は流転するものであり、永久に変わらないというものは世の中にひとつも無い」と書かれている。

原始時代の人類は、自然物を採取し生活を営んでいたが、経験と改善を積み重ね、種子をまき穀物を収穫し、家畜を飼い肉や乳をとることが出来るようになった。即ち、生産手段を持ち生活を豊かにすることが出来たわけである。

戦後社会の状況下で印象に残っていることは数多くあるが、「舶来品」「食糧難」「自動車」「テレビジョン」etcを取り上げても、昨今の経済環境下での持つ意味合いとは格段の差がある。

戦前、戦後を通じ「舶来品」とは、高級品、高品質の代名詞の様に使われ、庶民こぞってあこがれの心情を持っていたと思うが、現在では〝Made in Japan〟が高品質の代名詞となっている。限られた分野で〝ブランド品〟と称する商品が、高級品としての扱いを受けているに過ぎない。

「食糧難」戦前、戦中派の世代にとっては、これほど辛い思い出を表わす言葉はないが、現在では殆ど忘れられるようになったばかりではなく、どんな種類の食物も簡単に得られ、今や飽食の時代となっている。

「自動車」が現在の様に庶民にも簡単に入手出来る時代が来るとは当時思いもよらなかった。この自動車も生産性向上の手法を確立し、品質管理を徹底した結果、欧米各国との貿易摩擦の対象として最たるものとなった。

この自動車でさえ、いつまでも同じ作り方をしていては、いずれは利益が低下し、企業の存続さえ危くするものである。従来とは違う商品の開発、販売方法の検討、生産技術の開発、他分野の新技術の応用と、多方面に亘る複合技術の検討がなされている。

今、我々の周囲を改めて見廻すと、エレクトロニクス技術を応用した製品に囲まれている。家電製品はもとより、電算機、OA機器等、その利用技術の開発とあいまって、今や社会生活にとって必需品となっている。また、通信技術の発達により、諸外国のニュースも、居ながらにして映像となって我々の家庭にさえ入って来るようになり情報化社会の源となっている。このようなエレクトロニクス技術の進歩は、利用価値の高い製品、商品を提供し、今後、人類の夢も無限に拡がることであろう。

我社は、エレクトロニクス業界の一端を荷う、プリント配線板のメーカーとして、創立後早くも二十年を経過しようとしている。

社会のニーズとして「省力化」「小型化」という言葉が一時期大きく取上げられたことがある。そのニーズに応える製品（部品）として、プリント配線板が脚光を浴びたわけである。電子機器の量産化を可能にすると共に利用分野が広まり、年々需要が確実に伸びたものと考える。

半導体技術の進歩と部品実装技術の開発により、プリント配線板に求められる内容も多岐に亘って変化して来た。一例を挙げれば、高密度配線化に伴い「スルーホールの小径化」「導体巾及び間隔がともに小」と言う問題が浮上した。加えるにノイズ対策、高密度小型化etcから、多層化へと移行が見られた。また、自動実装技術の開発（自動実装機の開発etc）により、穴位置精度が問題となり現在では表面実装上の種々の問題点をクリヤーする必要が生じた。将来は電子機器の高速化により、新しい技術の開発、及び高品質の要求に対処する必要が生じよう。

これらの問題に対処するため、高品質の製品を必要な時に必要なだけ作り、客先に供給するという基本的な考えに立ち、新技術を導入した新しい工場を、中津川市に建設中である。

最後に、品質管理は専門家によるQCだけでなく、全社員が「不良品をゼロにする」という信念と、各立場の人々が相互に信頼する「人の和」が大切であり、社会のニーズは常に変化するということを念頭に置き、平成元年を夢多きスタートの年としたい。